

メニエール病に対する新しい治療、中耳加圧療法 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 福嶋 宗久

めまい発作と難聴・耳鳴・耳閉感を繰り返す病気

メニエール病は平均50歳前後の壮年期に発症し、めまい発作とそれに伴う難聴・耳鳴・耳閉感を繰り返す疾患で、環境などのストレスが発作の誘因となることが多いようです。発症する原因は不明ですが、内耳に内リンパ水腫が形成されることが知られており、当院ではMRI検査による診断が可能です(図1)。経過が長期にわたると難聴が徐々に進行し、持続する耳鳴や浮動感に苦しめられることになります。

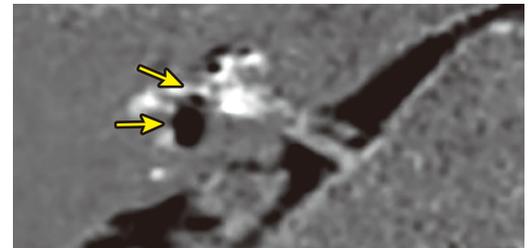


図1) MRI検査による内リンパ水腫の検出(黄色矢印部分、JAMA Otolaryngol Head Neck Surg. 2020の図より引用)

メニエール病に対する治療は?

メニエール病に対する治療は段階的に進めることが推奨されています(図2)。まず十分な睡眠など生活習慣の改善や水分摂取・有酸素運動等から始まります。次の段階として利尿薬や抗めまい薬等の薬物治療を行います。これらの治療でめまい発作が減少しない場合は、手術(内リンパ嚢開放術)あるいは今回ご紹介する中耳加圧治療を行います。中耳加圧治療は2018年9月に正式に保険収載された新しい治療ですが、当院では2015年から臨床試験として開始しており、これまでの施行症例数は国内最多です。中耳加圧治療と手術のうち、いずれを行うかはめまいの状況や患者さんのご希望等によりますが、併用して行う場合もあります。

1. 保存的治療
生活指導、心理的アプローチ、薬物治療

2. 中耳加圧治療

3. 内リンパ嚢開放術

4. 選択的前庭機能破壊術

図2) メニエール病発作予防の段階的治療

新しい低侵襲な治療法、中耳加圧療法とは?

小型の携帯装置(図3)を使用して自宅にて自分で治療を行います。使用法は簡単で、原因となっている側の耳に耳栓状のチューブ先端を挿入し、装置本体の開始ボタンを押すだけです。3分間で自動的に停止しますが、1日2回を基本として行い半年間続けることが目安となります。装置は病院からお貸しし、診察時に使用料を支払いいただくようになります。



図3) 中耳加圧装置

まずはめまいの原因を調べる

めまいを生じる原因は様々ですが、耳が原因でめまいが起こることは多く、なかでもメニエール病は進行する難聴も引き起こす厄介な病気です。めまいの正確な原因を明らかにすることが難しい場合もありますが、当院では平衡機能検査・MRI検査等によりメニエール病の確定診断を行っています。めまいがなかなか治らず、耳の異常も感じる場合は早めにご相談ください。

関西ろうさい病院の理念

●● 良質な医療を働く人々に、地域の人々に、そして世界の人々のために ●●

病院運営の基本方針

- ・私たちは、働く人々の健康確保のための医療活動、即ち「勤労者医療」中核的役割を担ってこれを推進します。
- ・私たちは、高度急性期医療機関として良質で安全・高度な医療の提供を行うとともに、地域の諸機関と連携して地域医療の充実を図り「地域に生き、社会に応える病院」としての発展を目指します。
- ・私たちは、患者さんの権利を尊重し、医療の質の向上ならびに患者サービスの充実にも励み、「信頼され、親しまれる病院」作りを心がけます。
- ・私たちは、「開かれた皆様の病院」として、ボランティアや有志の方々の病院運営への参加・協力を歓迎します。
- ・私たちは、病院使命の効果的な実現のために「働き甲斐のある職場」作りを行い、運営の効率化と経営の合理化を推進します。



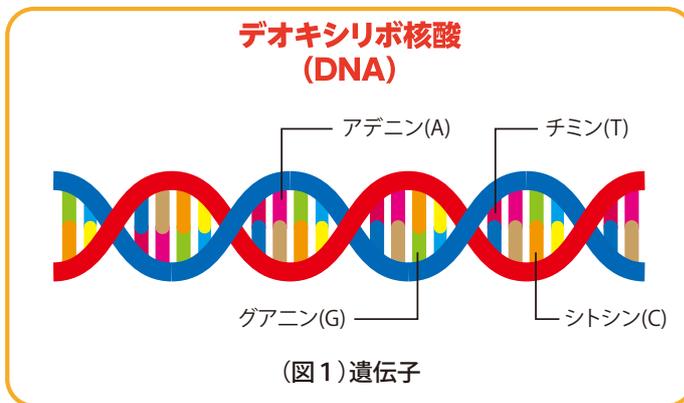
イメージキャラクター
かんろつこ

がんと遺伝子 ～がん遺伝子パネル検査～

腫瘍内科 籾智 幸政

遺伝子とがん

私たちの体は、約37兆個の細胞からなり、遺伝子(図1)と呼ばれる設計図によって厳密にコントロールされています。遺伝子に間違いが起きた場合に正しく修正されないと、遺伝子は正しく働くことができなくなり、細胞はコントロールを失ってしまいます。コントロールを失った細胞が起こす病気を「がん」と呼んでいます。コントロールを失うとは、細胞が無限に増え続け、体内のあらゆる場所に移動することを意味します。



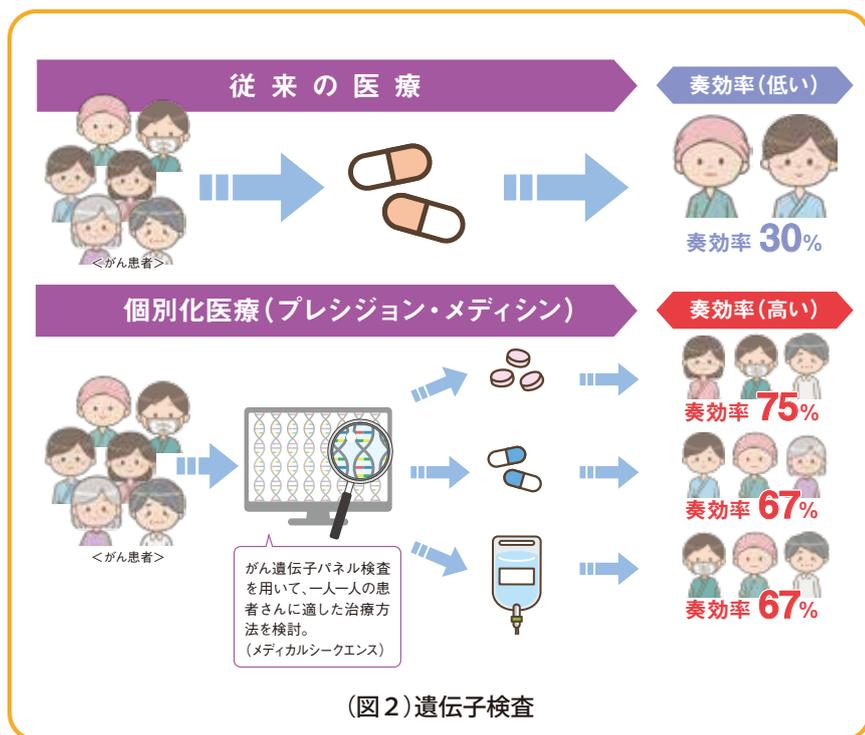
未来の医療「個別化医療」

私たちのからだがお互いに異なるのは、遺伝情報が異なるからです。この異なった遺伝情報を病気の予防や診断、治療に役立てる「個別化医療」が未来の医療です。私たちはまだ、個別化医療の入り口に入ったばかりですが、個別化医療は確実に進歩しています。まずは、大量の遺伝情報を短時間で調べることができるようになりました。血液や腫瘍の組織から遺伝子を取り出して調べますが、現在利用できる検査では数十から数百の遺伝子を検索することが可能です。次に、遺伝子異常に対する治療薬剤の選択肢が確実に増えています。これらの遺伝子検査や治療は保険診療で可能となっています。しかし、良い面ばかりではありません。がんであっても遺伝子に異常な変化が見つからない場合、検査がうまくいかない場合、遺伝子の異常が見つかって、薬剤が無い場合や治療の条件にうまくあてはまらない場合もあります。また、医学は常に発展途上にあり、いまだにわからないこともたくさんあります。このような事情から遺伝子を調べて治療ができるのは10人に1人となっています。

遺伝子治療の活用

遺伝子の種類によっては、生まれながらにして「がん」になりやすい体質をつくってしまう場合があります。このような場合には、血縁者の方の問題にもつながります。このような遺伝子を引き継いでいるという事実を知ることは精神的な負担になりますが、がんの予防や早期発見のために健診を定期的に行うという選択肢をとることもできます。遺伝カウンセリングを受けることでこれらの問題に対してサポートが得られます。

がんに関する遺伝子検査(図2)のメリット・デメリットを知っていただき今後のがん薬物治療のサポートができれば幸いです。遺伝子検査などについて関心のある方は、主治医などへご相談ください。



(図2) 遺伝子検査